

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成16年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第44巻8月号(通巻541号)

風土

8



釣 忍

神 蔵

器

ほととぎす八幡平を右におき
膝折れば祈る形や雲の峰
白桃を灯せり夜の入口に
うすものの僧の袖よりマイク出て
盗まるるを待つ仏壇のさくらんぼ

白妙の白に火のつく立葵
生も死も白花ほたるぶくろかな
枇杷すする午前三時の目と耳と
弔電の中よりひゞく夏の川
漱石の門にて返へす沙羅の花
こくげんをたがはぬ風や釣忍
家奥に赤子の眠り田水沸く



竹間集

同人作品



桐の花

山田 暢子

短夜や看取らるる人看取る人
明易し冷たくなりし手をさする
囁りや 柩の中に 叔母の顔
施主もまた癌を病みをり 薄暑の灯
霊柩車 五月の海へ 寄り道す
死を以て 終りしドラマ 桐の咲く
ふるさとの 駆ふるさとの 若葉の香

薔薇ひらく

門伝 史会

ほととぎす一声鳴けり 井戸曲輪
桐の花 太閤橋を渡りけり
「風土年譜」書く卯の花腐しかな
将門の守る 神田や祭過ぐ
江戸の粹残る 坂の名走り 梅雨
梅雨の木となりて 楷樹の枝ひろぐ
中庭文化学院に 自由の風や 薔薇ひらく

「櫻」以後（四十六）

野沢しの武

十二月八日未明の雪熄みをり
抽出より紙鏝出て日短き
雪の句の選評のまた胸打てる
寒鰯の句を書く色紙真くれなゐ
梟や刃物 眠らぬ夜の 厨
俳号を変ふる話や 枇杷の花

源 流 の 里

— 浜 福 恵 —

源 流 の 里 や 育 ち て 瓜 茄 子
塾 に 灯 の 入 る や 田 蛙 鳴 き は じ む
母 の 忌 の 今 朝 一 椀 の 夏 蕨
三 日 ま り を 蔓 の 逡 巡 か ら す 瓜
子 に 一 つ 星 座 教 ふ る 竹 床 几
じ や が た ら の 花 の 盛 り の 保 育 園
園 外 保 育 の 黄 組 桃 組 花 卵 木
日 当 り が 好 き よ 目 高 と 子 ど も た ち
水 底 に 影 ズ ー ム イ ン 水 馬
道 草 の 連 れ は 紋 白 揚 羽 蝶

六月の翳を湛へり水源湖
ひとごゑの森や出口に忍すいかずら冬
源流の里や旧曆端午の日
山の氣に溺れし夜なり冷奴
鳴き競ふ夜蛙の目を思ひけり
伝説の池の蛇姫蚩かな
蛇姫の宮より暮るる初蚩
初蚩一会の椅子を譲らるる
夫の掌の窪に預けし蚩かな
逢ひに来し想ひなりけり蚩の夜

山河集

同人作品



神蔵
器選

真つ直ぐに沖を見てゐる日傘かな

兄送る炉鳴りに耐へて春の雲

潮の香の源義句碑に囀れり

二の丸の狭間の下の苗木市

鰐口を叩けば現るる黄金蜘蛛

近藤幸二郎

一つ咲く座禅草にも祈りかな

ぼうたんへ心のうちをかくしをり

若葉風番所の鎧瓦にも

青梅雨の櫛大樹を見てをりぬ

葉桜の二月堂より三月堂

中村 洋子

羅の車中より道訊かれけり

急行の車内臙のまま走る

蛇衣を脱ぎし岩屋の雨しづく

保田英太郎

春潮にむかひ木刀振りおろす
青嵐子のゐる家を狙ひ撃つ

雪溪を餌の果にホルン吹く
小林 和子

光年や竹ひとふしの皮を脱ぐ

男体山なんたいの風の一縷に花胡桃

バスで行く雪溪までを夕焼けて

逃水を追ひつめてゆく誕生日

信富士村一茶の里 四句

山笑ふ付木に一茶自筆の句

『董塚』序文の草稿あやめ咲く

花人じよんのみやとなりて一茶の里桜

十一宮じよんのみや祀る依代桜かな

一日を茶のみで過す走り梅雨

平田紀美子

風土独語／神蔵 器



真つ直ぐに沖を見てゐる日傘かな

近藤幸三郎

中年の女性が浮かんでくる。戦後間もない頃であれば、南冥に散つた夫や子を思い遙か沖を見詰めているとも考えられ、また、若い人であれば、草田男の「玫瑰や今も沖には未来あり」といった明るくひらけた視線が感じられるのであるが、この句にはそのどちらも感じられない。

極端な言い方をすれば、この句の日傘の女は、沖を見ていながら実は沖は見えていないのではないか。作者は傍観者であるから、立ち入ったことは言えないところだが、日傘の女はただ沖を見ているだけとは思えない。孤独な哀愁、人生の深い蔭がただよう。それは日傘の女が自分自身の心のうちを「真つ直ぐに」見詰めているからである。

羅の車中より道訊かれけり

保田英太郎

この羅の人は何者であろうか。何となく気にかかる。直接、羅の人が運転しているとも思われず、助手席にいて、その女が道を訊くというのは、渡辺淳一の「失楽園」の一駒を見るような気さえてして来る。秘密の匂いを感じるのは私だけであろうか。作者は

さり気なく羅の女に道を訊かせている。手腕は大したものだ。

『董塚』序文の草稿あやめ咲く

平田紀美子

前書に「信州高山村一茶の里 四句」とある中のものである。一茶ゆかりの里、高山の一茶資料館には『董塚』の序文の草稿と、次のごとき説明書きがある。

一茶は久保田春耕のため俳書『董塚』の出版を計画していたが、これは、春耕の立場になって、一茶が書いた序文で、後半が欠落している。『董塚』は出版されなかったが、久保田家に伝えられている句帖「浅黄空」は『董塚』に入れるものとして一茶が選んでおいたもの、という説がある。

久保田春耕は高山村紫の人で、一茶が四十七歳一八〇九（文化六年）に春耕を訪れ、以後親しい交際が始まるが、後に春耕が提供した離れが、北信濃の高山村、近在の活動の拠点となった。

春耕は養子で、義父久保田兔園は本格的な蕉風俳諧を導入し定着させた善光寺の俳人戸谷猿左の門人で、兔園も深く芭蕉を敬慕し「山路来てなにやらゆかし董草」を句碑として建てよう春耕に遺言して亡くなった。久保田家は高山切つての大地主で、春耕は義父兔園との約束を果し、芭蕉の「山路来てなにやらゆかし董草」と兔園の「我のみがかる桜の朝ぼらけ」の句碑を建て、二つの句碑を心のよりどころとした。

一茶は兔園によって高山村に芭蕉の正風を慕う俳系の伝わっているのを喜び、かつ兔園の人柄を愛した。句碑となった「桜の朝ぼらけ」の句も立句として連句の興行をしたこともあった。そんな関係もあって、春耕の句集に『董塚』と名付け、一茶は序文を

書きはじめた。文政三年である。

文政三年（一八二〇）、一茶は中風を発病、しかし比較的軽く、言語障害になるがまもなく回復している。『おらが春』執筆、『八番日記』も前年から引きついでいる。

それから七年後、文政十年（一八二七）十一月十九日に、一茶は仮住まいの土蔵の中で死去している。この間、家庭的には次男石太郎、三男金三郎を亡くし、文政六年に妻きくを亡くし、文政七年にはゆきと再婚するが、まもなく離婚、中風再発、文政九年には三度目、ヤヲと結婚、そして文政十年の柏原の大火で母屋類焼と七年のうち普通の人の一生よりも波乱に富んだ生きざまである。

しかし一茶の筆力をもってすれば『葦塚』の序文を完結して出版することもさしてむずかしいことではなかったであろう。

文政十年六月一日の柏原の大火で焼け出された後に出された、春耕あての書簡

御安清奉賀　されば私は丸やけに而是迄参り候　此人田中へ参り候　私参候迄御とめ可被下候　右申入度かしく

壬六月十五日節

土蔵住居して

やけ土のほかりく／＼や蚤さはぐ

一　茶

紫　春耕大人

「蚤さはぐ」の句、私は一茶の句の中でも傑作だと思っている。それはともかく、『葦塚』が何故出版されなかったのか、序文の後半の欠落の理由もわからない。残念である。

すれ違ふ日傘に小倉遊亀思ふ

安永　圭子

小倉遊亀の図というのは、一九六六年（昭和四十一年）作の「径」ではなからうか。お母さんが先頭で落ついたら色の明るい日傘をさし、その後を四、五歳ぐらいのおかっぱの可愛い女の子が黄色の日傘をさし、日傘の絵の握りに赤い小さなバッグを引つけている。その後ろを犬（たぶん柴犬と思う）が躡いて行く。何ともほほえましい絵であった。東京芸術大学美術館所蔵となっていたが、私は一昨年東京国立近代美術館での小倉遊亀展で見ることができた。「径」は最も感心しし心に残った作品であった。

日頃、圭子さんの句には、画家としての独自の鋭い目、微妙な把握のあることを感じていたが、掲出句なども、専門の分野は異にしても同じ画家を志す者として小倉遊亀にほぼ親しみを持っているのであらう。すれ違った日傘にも遊亀の絵を思い、百歳を過ぎてもお「まだまだ小僧っ子」、生涯修行の志を全うした遊亀はその絵の一つ一つにも指曠されるものが多い。

子子の神田生れでありしかな

林　裕子

「すし、食いねえ、食いねえ、江戸っ子だつてねえ」

「神田の生まれよ！」

作者は神田明神、御輿庫の前の天水桶というから、神田生まれも、まさに生粋の神田っ子。風土の竹の子句会の吟行があった五月二十三日のついで一週間ばかり前、神田祭が終わったばかり、天祭の祭囃子を守歌に聞きながら大きくなったに違いない。それが何と子子であるのが楽しいではないか。

風土集



神蔵器選

ぼうたんの闇に浮力のありにけり 川崎 潮 伸子

若葉してわが晩学に孔子の木

葉ざくらや鴨立庵に川流れ

日は西に出雲街道麦の秋

愛蔵す無名の絵画芥子の花

噴水のしぶきの奥に基地の街 横須賀 平田紀美子

浦賀水道刑場跡や卯波立つ

薔薇を見に文学館に来てゐたり

梅雨兆す学生街の日曜日

神田川のぞく五月の聖橋

梅雨兆す神田に出会ふ蛇笏の書 東京 林 裕子

子子の神田生れでありしかな

やつちやばの御輿眠らす木下闇

軽羅かなニコライ堂に吸ひ込まれ

明易や聖堂に空降りて来し

学生のフアツシヨン街に夏来たり 三鷹 布施まき子

孔子廟楷樹新樹となりて立つ

枳咲くやビルに大学喫茶室

鯉のぼり多摩に十々里とどろの古戦場

観音の木彫り卵の花腐しかな

本陣の裏にたかな皮を脱ぐ 藤枝 間島あきら

正雪紺屋にメールボックス若葉風

黒蝶と辿る西行峠かな

花屑の縁取る弥生住居跡

植木屋の雲より外す花一枝

リラ咲いて信濃日日支局かな 川崎 森田節子

例幣使街道下る麦の秋

本陣の出桁に育ち燕の子

将門の首塚を発つ神輿かな

陵に巡査の詰所著莪の花